

盧溝橋事件以後(一九三七～一九四五)の在日中国人留学生

——さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』再考——

河 路 由 佳

一 はじめに

近代における中国人の日本留学は十九世紀の終わり、清国の末期に始まって百年を超える歴史を持つている。在日中国人留学生に関する研究には、中国人留学生教育に生涯携わった松本亀次郎による『中国留学生教育小史』(一九三一)、それを受け継いで歴史を書き継ぎ、戦後も語りつづけた実藤惠秀(後に「さねとうけいしゅう」)による一連の著作(『中国人日本留学史稿』一九三九・『中国人日本留学史』一九七〇・『中国留学生史談』一九八一など)のほか、中国人研究者による黄福慶『清末留日学生』(台湾・一九七五)、嚴安生『日本留学精神史』(一九九二)といった蓄積がある。「清国留学生」については、革命運動

の指導者(黄興・蔡鐸・秋瑾など)や文学者(魯迅・郭沫若・郁達夫など)をはじめ目ざましい活躍をした人物が多く、論じられる機会が多い。

しかし、日中間の戦争が全面化し、日本の中国大陆への侵略が進められてゆく時代の中国人留学生に関してはほとんど論じられていない。実藤惠秀が戦後の著作において繰り返し述べるのは、盧溝橋事件の起きた一九三七年に中国人留学生が大量に帰国し、この年をもって中国人日本留学史が終わった、という認識であり、この年以降の状況について記述されることはなかった。

しかし、実際には、中国人留学生の受け入れ機関であった日華学会⁽¹⁾は一九四六年に解散を余儀なくされるまで存続し、中国人留学生の受け入れ・教育を続行していた。

本稿では、まずこの時期の留学生の実態を明らかにし、あわせて実藤恵秀の言説の再検討を行う。中国人留学生史研究の権威とされる実藤恵秀が、戦前戦後で如何なる変節を遂げ、それを如何に説明したのか、その時に抹消された事実は何だったのか、問題の所在について考察する。

二 実藤恵秀『中国人日本留学史』(一九七〇)における歴史認識

戦前戦後にわたって中国人日本留学史研究を行い、その研究によって一九六〇年に文学博士号を取得したさねとうけいしゅう(一八九六―一九八五。本名は実藤恵秀。戦後、彼の文字改革への意志を反映して仮名書きされるようになった。本稿では、以下、「実藤恵秀」を用いる。)は、その集大成といえる著書『中国人日本留学史』(一九七〇)の中で、戦前・戦中の中国人の日本留学の歴史は一九三七年の盧溝橋事件をもって終わったと断じている。その認識を語る部分を引用する。(傍線は筆者)

日本と中国とのあいだは日に日にきんちょうの度をくわえていた。「満州国」から長城線の南へ、「河北自治運動」から「冀東政府」へ、「冀東政府」から「冀察

政務委員会」へと日本軍閥の侵略の手はつぎつぎと伸び、とどまるところをしらなかつた。中国では抗日のための民族戦線が結成され、西安事変によって蒋介石も抗日にふみきらざるをえないことになった。留日学生も新聞雑誌その他による抗日運動をして、日本の官憲から追放されるようなこともおこつた。日本語熟と抗日運動のうずまきであつた。

こうしたとき、一九三七年七月七日に盧溝橋事件がおり、全面戦争に拡大されていつたのである。この事変がおこると、駐日大使館・留学生監督処も閉鎖され、留学生は総帰国をし、ここに留日学生史がおわつたのである。⁽³⁾

この認識は実藤恵秀が戦後一貫して唱え続けたもので、同書の「はしがき」には次のような文章も見える。(傍線は引用者。……は引用者による中略。以下の引用文も同じ)

日清戦争から日本敗北までの五十年間は日本と中国との関係の最悪の時代であつた。一九三七年からの侵略戦では八年のあいだ中国の要地をあらしまわり、一千万人の中国人をころし、五百億ドルの財をむなしくし

たといわれている。日本人としては中国人に顔むけで
きないことをした時代であった。

しかし、このくらいくらしい時代にもわずかばかりの
ひかりはあった。……ひかりとは中国人の日本留学と
いうことである。中国から日本への留学は一八九六年
から一九三七年まで四十二年間つづいた。⁽⁴⁾

一九三七年をもって中国人留學生が日本からいなくなっ
たかのような印象を与える記述である。実藤恵秀は、一九
三七年以後の中国人留學生については一切語っていない。

三 戦中の在日中国人留學生の実態

三―一 在日中国人留學生の人数

一九三七年以後の在日中国人留學生の実際の状況はどの
ようなものだったのだろうか。新たな学生の来日の道は完
全に閉ざされたのだろうか。当時の資料から検証する。

中国人留學生受け入れを担当していた日華学会は、一九
二七年より毎年中国人留學生名簿を発行している。大学・
専門学校に通う学生の名を学校別に並べ、年齢、出身地、
公費私費の別、在学年などを記した詳細なものである。こ
れ以外の機関に学ぶ学生が外にいたことは考えられるが、

この名簿から知ることのできる人数は最小のものとして信
用してよいと思われる。前後の状況を見渡すため満州事変
以前の数字から掲げる。⁽⁵⁾ なお、一九四〇年度より「満州
国」の学生については、駐日満州国大使館に任せると説明
され、この名簿からは消えている。満州大使館の名簿は未
見だが、それを反映していると思われる数字が「満州国学
生日本留学拾年史」(満州国大使館内学生会中央事務所
一九四一)にある。一九四〇年度・一九四一年度に関して
はこの資料からの数字を括弧に入れて示す。その後の「満
州国」の学生数は未確認である。⁽⁶⁾

一九三七年の盧溝橋事件以後、「中華民國」の留學生を
中心に大量帰国があったことは確認できるが、翌年から中
華民国の留學生も再び増え、一九四四年度にも千人を越え
る留學生がいたことがわかる。名簿を見ると、この間も毎
年、新たな留學生が来日している。

一方「満州国」の留學生は一九三五年に千人を超え、そ
の後も安定した人数を保持している。「満州国学生日本留
学拾年史」の年表で一九三七年(康德四年)の項を見ると
事変の起きた一九三七年七月にも「留學生予備校」が開校
し、十月には「第一回留学認可試験」施行、とあるばかり

一九四四年度	一一一八	—	—
一九四三年度	一三八〇	—	—
一九四二年度	一三四一	—	—
一九四一年度	一四六六	(一一二〇)	(二六八六)
一九四〇年度(注9)	一二〇四	(一二五六)	(二四六〇)
一九三九年度(注8)	一〇〇五	一三三四	二三三九
一九三八年度(注7)	一五一二	一六二四	三一一六
一九三七年度(十一月一日)	四〇三	一五〇三	一九〇六
一九三七年度(六月一日)	三九九五	一九三九	五九三四
一九三六年度	三八五七	一八〇五	五六六二
一九三五年度	二三九四	一一三三	三五二七
一九三四年度	一四一一	七五七	二一六八
一九三三年度	一〇四三	三二四	一三五七
一九三二年度	一〇八三	三一七	一四〇〇
一九三一年度	二二五六	七一六	二九七二
一九三〇年度	二三五一	六九八	三〇四九
一九二九年度	一八七三	六一〇	二四八三
一九二八年度	一九二九	五五一	二四八〇
一九二七年度	一四九三	四三一	一九二四
	中華民國	満州国	計

である。「満州国」は事変の影響で動揺することなく、むしろ、留日学生会中央事務局長の謝延秀が「留学生派遣の主旨」(一九四一)¹⁰に「我々は親邦と戦争遂行の共同体制をとると共に我國民の精神教育も又親邦と共に緊密な共同事業を行はねばならぬ。茲に於て留学生派遣の有する使命は益々重大を極めてきたと確信する」と述べるように、留学生派遣は積極的な意義を与えられて引き続き促進された。

三一二 盧溝橋事件以降の「中華民國」留学生

一九三二年に成立した「満州国」はもとより日本政府の「傀儡国家」で「親邦」日本と歩みを同じくすべく運命づけられていた。翌一九三三年から国家的な留学生派遣が始まり、盧溝橋事件後も基本的にその路線を歩み続けた。

事件の大きな影響は全面戦争の相手国となった「中華民國」にあった。盧溝橋事件のあと留日学生の九割が帰国し、中華民國駐日留学生監督処は十月八日に閉鎖された。実藤が「中国人日本留学史終わる」と述べる根拠である。

しかし、一九四〇年度の『中華民國留日学生名簿』に、(西暦の付記は引用者による)

其の後(引用者注・盧溝橋事件をきっかけとした留学

生大量帰国の後)東亜の情勢漸次変化を来し、昭和十三(一九三八)年には臨時政府および維新政府相次いで成立し、更に本年(一九四〇年)三月には國民政府南京に遷都するあり、東亜新秩序建設の認識漸次高まるに随ひ留日中華民國学生実数も昭和十二年末の三百名を底として漸増の傾向を辿り、今年六月現在にては上記の七九二名、其後漸次上昇の傾向に在り。

と書かれているとおり、一九三七年十二月に北平(北京)に樹立された「臨時政府」また一九三八年二月に南京に樹立された「維新政府」、そして一九四〇年三月にその南京に建てられた「國民政府」(いわゆる汪兆銘政権)の後押して、敗戦の年まで留学生が来ていた。抗日を掲げていた蔣介石の政権と共產党は日本にとって敵であったが、「親日反共」「和平建国」を掲げる汪兆銘政権は共に太平洋戦争を戦う仲間である、と当時の日本政府は喧伝し日本國民はそれを信じるように教化されていたのである。

その事情を物語るものとして汪兆銘が一九四一年六月二十二日に東京帝国大学大講堂における中華民國留日学生会主催の歓迎会で行った講演の筆記録が「日華学報」八十五号(一九四一年九月)に掲載されている¹²。熱のこもった

この演説は六百名の中華民国留学生に感銘を与えたと解説されており、汪兆銘政権と日本とが緊密に手を組んでいた当時の雰囲気¹²の伝わってくるものである。一部を引用する。

留学生諸君よ、私はどういいうわけで和平運動に献身したかということを考えよ。私は敗戦を恐れて和平を提唱したのではないのである。……善隣友好は即ち外交方針の一致、共同防共は即ち軍事方針の一致、経済提携は即ち経済方針の一致である。かように外交、軍事、経済等の方針がすべて一致するならば、どうしてお互いに戦う必要があろうか。この共同一致に基づいて中日両国間には新しい道が開けるものと私は強く信じている。あくまで抗戦を主張する人々にはこういう点がいわからないのである。いやしくも和平を説かんとすればよくこの点を理解しなければならぬ。……諸君よ、将来中国の青年と民衆を指導すべき最も精鋭なる青年となつて、大に国家の為に努力せよ。私のようにもはや五十九歳にもなつて、未だに国を救うことができないようなことがあつてはならない。

日華学会教育部では一九四〇年十二月留日学生生活概況調査を行い、留日学生全体の三分の一弱にあたる三八四名

(中華民国学生三一一名、満州国学生七三名) から回答を得ている。調査結果は「日華学報」八十五号(一九四一年九月)同八十六号(一九四一年十一月)に、詳しく報告されているが、冒頭には次のように当時の留学生教育の立場が述べられている。

事変始まつて今や將に滿四年に近づかうとしてゐる。

……南京に汪政権新国民政府の成立せるあり、彼我の諒解は既に成つて、所謂親善合作の基調の下に両国の国交は今や具体的にも漸次調整の域に入つてゐるのである。即ち我等が只管に矛を採るのは何時迄も我が真意を覺らず飽迄抗戦を叫んで居る蔣政権其者に対してのみの事であつて、決して中国を相手にして居るわけでは無い。……要するに国策の基本は既に一定して居るので、親善の他の何物でも無い。途はもう開かれて居るのである。況んや中国留学生の既に来朝せるもの甚だ少なからず、而も引き続いて今や盛んに渡来しつつあるのである。……彼らが果して我が真意を諒解して、日華親善新東亜建設の好き我等の分担者と成るも成らぬも、一つには我等が彼ら¹³を遇し教ゆるの態度に懸つて居る事に思ひを致すべきであらう。

留学生教育の現場は、学生たちを親日的に感化する使命感を与えられ、以前にも増して活気づいていたことがわかる。東亜学校ではこの間、以前から使われていた教科書『日本語のはじめ』や『日本語読本』の版を重ねていたのみならず、⁽¹⁴⁾一九三八年九月に『東亜日本語辞典』を刊行している。中国人留学生の日本語学習に目的をしぼった辞書で、東亜学校の教師たちの経験に裏打ちされた工夫の見える親切で丁寧な作りである。⁽¹⁵⁾

さて、このような環境で学んでいた留学生の実態はどのようなものであったのだろうか。調査の結果は日華学会の経営する日本語教育機関である東亜学校在学中の学生二五〇名と大学や専門学校で学ぶ留学生六一名からの回答がそれぞれ別に報告されているが、来日時期を見ると前者は二人を除く全員が、後者は三十九名が一九三七年七月以後である。本稿では盧溝橋事件後の留学生に焦点をあてるため前者の結果に注目する。

出身省は河北省が一〇四名と全体の四二パーセントを占めており、江蘇省の三八名、広東省の二九名が続く。河北省は北京・天津、江蘇省は南京・上海があり、いずれの都市も日本軍に掌握されていた。河北省は特に、大きな規模

で留学生試験を行って官費留学生を積極的に送っていた。これらの地域では初等教育から日本語の授業が義務付けられていたことも、日本留学を現実的にしただろう。留学の動機に「留学生試験に合格して（二四名）」「国の教師の指導によつて（二名）」「事変のため郷里は不安定（二名）」「中日学院六年間の蕪染の結果（二名）」などの回答が見られる。また、来日前の日本語学習については六九名が「学んできた」と答えており、学んだ機関として、天津・北京・南京・上海などの中学校や師範学校の名が挙げられている。「留学費用」は「公費」が一四一名と半数を超えている。「外務省の文化補給費」が六九名、「河北省公費」が五一名、広東省公費一〇名、安徽省公費三名、北京教育総署二名、ほかに、江蘇省・山東省・浙江省・福建省の公費がそれぞれ一名である。

留学の目的は、学問研究を挙げたものが八〇名（日本語研究五名、日本文化研究四名等を含むが、最も多いのは医学の二二名で、工学一二名、農学九名など全体の三分の二が理科系分野）。「日華親善・文化交流のため」が三二名、「日本を知るため」が一一名である。住居は「日華学会経営の寄宿舎」が一〇名、「素人貸間」が五八名、「下宿」

が三〇名など。「帰国後の希望方面」は「官界政治界」四名、「教育界」四三名、「実業界」四〇名、「医薬界」三〇名、「工業界」二二名が上位である。調査項目は他に趣味、食事、健康、希望する留学生のための施設、東亜学校への意見、休日の過ごし方などに及んでいる。

「傀儡政権」の指導下にあるという性格は明らかであるものの、その中であってそれぞれの留学生が知識欲に燃えて異文化社会の中で奮闘している様子が見え、それを支える受け入れ側の熱意も見える。留学の実体は紛れもなく存在していた。

四 実藤恵秀は何を隠蔽しようとしたのか

実藤恵秀の記述は事実には反していると言わざるを得ない。なぜ、実藤は事実には反した記述を行ったのだろうか。彼の戦中と戦後の言説を比較することで明らかにしてみたい。

実藤恵秀の一九三七年をもって「中国人日本留学史は終わる」という認識が最初に示されたのは一九三九年三月の『中国人日本留学史稿』においてである。⁽¹⁷⁾一九三七年十月に中華民国駐日留学生監督処が閉鎖、監督陳次溥が引き揚げたという事実もあり、実藤恵秀がこの執筆時点で、この

年を留学生史の終焉と感じた可能性は考えられる。

しかし、実藤はこの後も中国人留学生教育に深く関わっていた。一九四〇年十月二十九日に日華学会で行われた「支那留学生教育に就て」と題する講演の筆記録が残っているし、一九四一年発行の『近代日支文化論』(大東出版社)には「留日学生教育論」という一章があり、積極的な提言を行っているのである。都立中央図書館の「実藤文庫」は実藤が蔵書を寄付したもののだが、一九三七年以後の資料も多く含まれている。

一九三七年以降の中国人留学生に関する事情を誰よりも知っていたはずだが、戦後の実藤はこの時期のすべてを著作から抹消し、敢えて一九三九年の旧著の記述を復活させた。

その謎を解くため、実藤が一九三七年から日本降伏までの間に行った留学生教育関係の言説を検討する。実藤もまた、汪兆銘を支持し、蔣介石を敵視していた。この時期、実藤がしきりに問題にしているのは「留学生教育は成功であったか否か」というもので、両国の国家的な利害を基準に考察するが、『近代日支文化論』(一九四二)所収の「留日学生教育論」⁽¹⁸⁾ではまず、中国側については「大局的にい

つて成功してゐると思ふ。」と述べて日本留学経験者が帰国して排日運動に尽力するのは、日本で「愛国心」を学んだから、という皮肉な効果を指摘、続けて日本から見た効果を「まことに不成功である。」と述べたあと、次のように汪兆銘政権への支持を述べている。

よくいはれてゐるやうに、たしかに日本留学生で抗日の線に大活動をしてゐるものもあるが、みながみなさうではない。相当に日本を理解した人々もあるので、たとへば錢稻孫⁽¹⁹⁾とか、周作人⁽²⁰⁾とかいふ人々のごときである。現在、新政府および新機関のなかで、東亜新秩序建設のために、立ちはたらいてゐる人々の多くは、かつて留日学生であつた人が多い、これなかりせば、新政府の誕生はもつとおくれてゐたかもしれない。

一方、敵対する蔣介石については、次のように述べている。

わたくしの尊敬する一先輩が「蔣介石は虎に乗つてをるからいいのだが、降りたらずぐ殺される」かういふ意味のことを言はれたが、わたくしも全くさう思ふ。……かれらは日本文化の真相・価値を知つてゐない、知るまで研究してゐない、これをわかるやうに知らせ

るとともに、われわれの文化をどこまでも昂揚してゆく。……留学生問題は、単に留学生問題ではない、過去をいへば、留学生教育がうまくいつてゐたらこのたびの事変は起らなかったともいひ得るし、将来に對していへば、留学生教育は興亜の基礎だともいひ得るであらう。⁽²¹⁾

抗日側は日本の眞価を理解してないのであり、理解すれば親日に転じ日本と手を携えて大東亜戦争を戦う味方となるはずである、というのがこの時期の実藤の主張であつた。これは一九四〇年十月二十九日の日華学会における実藤の講演「支那留学生教育に就て」の筆記録の中に、よりはつきりした形で表れている。

日本では日本が一番だと思つてをりますが、世界から見てさう思ふ様な文化国になると云ふ事は絶対に必要な事だらうと思ひます。之と殆ど同じ言葉を言換へる訳になります、この会でも皆様のお話のあつた興亜理論の確立。之なくしては支那をリードする訳には行かないのでありますが、それが唯一つのスローガンだけでなくして、はつきりした理論を持つた新哲学・新世界観。斯ふ云ふものが生れるだらうと私は信じます

が、之を早く生れさせたい。……此の線に沿へば支那留学生も泰の留学生も、南洋留学生も、本当に日本を本山としてやって来る。斯うなれば下宿が実はどうなうとたいした問題ではなく、日本語は学ぶと言っても学びますし、まあ其処へ行きたいと深く希望する次第であります。

実藤の留学生教育観は、文化の劣った国から留学生が日本の文化に憧れて学びに来て、日本的感化を受け、日本的秩序を推進する人材に育つことを理想とするものであった。それは大東亜共栄圏建設という当時の国家の目標に沿うもので、実藤の発言は、当時の国家における「正論」であった。そのために日本の絶対的優位性を諸外国に認めさせなければならぬ、という幻想の中に実藤はいた。そこには相互理解という姿勢もなければ、教育主体側の枠を超えた留学生の創造的な活躍への期待もなかった。

そして、敗戦をもって実藤の信じた「理想」が幻と消えた時、彼はその「理想」とともに「理想」を語った事実をも消し去ろうとした。

『中国人日本留学史』(一九七〇)では「日本に留学して帰国し、活動した、あるいは活動している人物、そのなか

には中国解放のためのしごとに終始した人もあり、あまりに親日的であったために中国人としての道をあやまって漢奸となった人もあった。」と述べるに至り、この部分には「漢奸は祖国に対する信頼の不足、世界情勢にたいする認識の不足などから中国人としての道をふみあやまったので、非難攻撃されるのが当然である。日本人としてはかれらを非難すると同時に、日本がかれらをそうさせた責任を感じなければならぬとおもふ。」という脚注が付けられている。

汪兆銘は一九四四年十一月に病氣療養中の名古屋大学付属病院で死んだ。その後蔣介石が国民党を率いて台湾に渡り、一九四九年には共産党によって中華人民共和国が建国されたが、その新中国では、汪兆銘は「漢奸」即ち売国奴の最たるものと断罪されており日本もそれを認める立場に立っている。実藤のこの書き方は、そうした戦後の国家的認識にまたびたりと沿うものである。

「傀儡政権」をパイプに日本留学をしたという事実は、新中国にとっては「売国的」な行為とみなされるおそれがあった。元留学生の安全への配慮も、当時の実藤にあったかもしれない。しかし、自らが行った言説もとも戦時下

の留学生教育を抹消し、新たな政權に沿う形に書き換えたのは、客觀的事實に対して研究者のとるべき態度を逸脱していると言わなければならない。

五 実藤恵秀の反省の中の虚構

実藤は戦中の自らの行いについてすべて口を拭おうとしたわけではない。『中国人日本留学史』（一九七〇）の中で、戦中を振り返り、長い反省の弁を述べているのである。

この三冊⁽²³⁾には留学史稿以後にかかれた文章がおおく、それらはすっかりふつうの日本人（侵略的日本人）になりきったもののいいかたがたくさんみられます。……これではまったく軍部のちようちんもち以外のなものでもない。いまはよみかえすにたえないほどしつれいなことばかりです。……とくにこの本は日本人によんで批判してもらうほかに、中国人にもよんで批判していただきたいとおもいながら書いてきました。それにはわたくしが中国人にたいしてきよらかではないことをおわびすることが先決条件だとおもい、このながいあとがきになりました。⁽²⁴⁾

戦後の実藤に相応の苦しみのあったことは察することが

できる。しかし、戦後の書物で彼が語っているのは、不覚にも時代に流されたことへの反省であり、それは本来の自分ではなかったという認識である。ここでは、その例を一つあげ、「反省」の中にさえ含まれていた虚構を検証しておくこととする。例とは中国の国号を「支那」と呼ぶか「中国」と呼ぶかの議論に関わるものである。

実藤は、『中国留学生史談』（一九八一）において、この問題に関する戦中の自らの言説を反省する形をとって次のように語っている。（傍線は引用者）

一九二〇年代のすえ、中国現代文学を研究するようになってから、郁達夫や郭沫若の作品から中国人は「支那人」といわれるのを極度にきらうことがわかった。

一九二八年から早稲田大学の教壇に立つようになった。どのクラスに出ても中国の留学生が一人か二人はいた。わたしは教壇では支那といわず、中国ということにした。相当の勇気が必要だった。……わたしは、その後の論文で、しばしば中国の国号問題を論じたが、そのころは、こういうことをいっていた。

「日本人よ、支那をやめて中国といおう。中国人よ、支那というのは、わるい意味ではない。」あとから考

えてみると、これは中心をはずれていた。

「支那」という文字がわるいのもなく、音がわるい意味を持っているのでもない。日本人が中国人を軽蔑した気もちでいうから嫌に感じたのだ。

さっきのことばは、こういういなおすべきだった。

「日本人よ、中国を軽蔑するな。中国人よ、日本人に中国を軽蔑するな、⁽²⁵⁾いいなさい！」

実際には、実藤は一九四〇年の日華学会における講演「支那留学生教育に就て」、一九四一年の『近代日支文化論』などで「支那」という呼称を多用している。しかも、それが「軽蔑」を伴って選ばれたことは、彼自身が明確に述べているのである。(傍線は引用者)

先づ中国人の意見は、提出者の方だから、みな同じ、『日本人が「支那」と呼ぶのは軽蔑した名前である、わが国は「中国」といふのだから、さういつてもらひたい』つづめていへば、これ一点張りである。……日本の方は抗議を申し込まれた方で、実は意外であつた。……この問題は、あきらかに非は中国にあるので、日本は迷惑至極と申してよい。……要約すれば、中国人

よ、支那人といはれることを嫌がるのはまちがひであ

る、日本人よ、中国とよぶのを非とする理由はない、といふことになる。……中国人の気持ちをもつと率直にいつてしまへば、「支那」といふな、といふことよりも「われわれを軽蔑してくれるな」といふことになるのではあるまいか？……中国にはたしかに尊敬すべきところが多い、それとともに軽蔑されることもあるとおもふ。軽蔑に価することを、軽蔑するな、といつてもできるものではない。軽蔑して軽蔑をあらはさぬのは、見上げた態度であり、さうあるやうに努める必要があるが、軽蔑される方から、軽蔑するな、といふのは正しいかどうか。⁽²⁶⁾

同じ本で実藤は、「支那」文化を比較して「支那」文化には抽象性が欠如している、と断じ「抽象性のないところには、科学は興り得ない」と述べるなど、中国文化に対する蔑視を露にしている。⁽²⁷⁾このような姿勢は中国人留学生に対する教育を語る場面にも表れていたことは、先に述べた留学生教育観にも明らかである。本来の自分を失って時流に流されたというには余りにも積極的な主張であつた。

一八九六年に広島県の農家に生まれ、十代で本願寺派の

衆徒となり、早稲田大学では支那文学を専攻、一九二六年に卒業して中学・高校の教師をしながらさらに東京外国語学校支那語専修科に学んだ実藤恵秀は、元来中国文化に敬意と親しみをもっていたのであろう。当時の日本では旧世代を中心に知識人の教養の中で漢籍はなお重要な位置を占めていた。が、その一方で、古代より長く範として仰いできた中国文化を国家をあげて否定して欧米文化に乗り換えるパラダイム・シフトが行われたのが明治維新であった。日清戦争の勝利を経て、日露戦争、日中戦争、そして第二次世界大戦に向かってゆく日本にあって、欧米に対する思いは屈折したが中国文化の否定は時代の思潮を牽引し続けた。

実藤は一九三八年に外務省文化事業部の在支特別研究員として一年間中国で暮らし、今日実藤文庫に寄贈されている四千六百点余りの書籍の大部分はこのとき集めたという。民間にありながら、実藤は国家の援助によって活動を展開しており、国家と立場を異にすることは考えられなかったようである。国家の為に中国の専門家である自身がどのように貢献できるのか。中国文学を専攻したことから中国人留学生教育に関わっていった実藤は、自分の中の中国文化

への親しみを否定しなければならないジレンマに陥ったものであろう。しかし、時の政府のスローガンを声高に言い立てた挙句、戦後は反省を装って虚構の弁解をしたことは、実藤の弱さであったと言うほかはない。

六 結語

一九三七年の盧溝橋事件以後、専ら「傀儡政権」と日本の結びつきによって推進された中国人の日本留学にも、留学の実体はあった。

実藤恵秀が「一九三七年をもって中国人日本留学史は終わった」と述べることで歴史からそれを抹消しようとしたのは、「留学生教育の目的」の自国中心主義など、彼自身の戦中の言説が時代を超える何物をも持たなかったことに起因していた。それは当時の国策に沿い過ぎたことの表れでもあった。歴史研究は特定の政治主体に近づき過ぎることなく客観的に行われるべきであることを改めて認識させる好例であろう。

実藤恵秀が留学生教育について述べる時に拘泥した「留学生教育の効果」について、松本亀次郎（一八六六～一九四五）は『中華留学生教育小史』（一九三二）の中で次の

ように述べている。

先輩の或方が、予に沿革を調べると同時に其の効果を調査することが、より以上に必要な事と思ふが、君の見る所で果して如何なる効果があるかと、問はれたから、予は即座に其れに答へた。効果と云つても、多方面に關係することだから、一言に言ひ尽す訳には行かない、若し問者の意が日本に対する効果如何であるなら、其は副式目的であるから後回しとし、兎に角、『中華民國重要な人物が留学生中から驚く程多数に出て居る』ことは効果の第一に数ふるべきであらう。⁽²⁹⁾

「留学生教育の効果」が当時の関心事であつたことが察せられる文章であるが、日本側への効果は重要ではないとして語らず、中国側についても主義主張に一切言及していない点が注目される。同書の「結論」には再度「留学生教育の効果如何」⁽³⁰⁾という小見出しが設けられているが、松本は、「留学生教育の目的に関し、最も多くの人の念頭に存する者は、日華親善の四字に在る様である」と当時の一般的な風潮を取り上げた上で、「日華親善固より可であるが、予が理想としては留学生教育は、何等の求める所も無く、為にする事も無く、至純の精神を以て」行われるべきだ、

と持論を展開している。「日華親善は、求めずして得られる副産物であらねばならぬ」というのが松本の主張であつた。

松本亀次郎の教育は、最後の教え子であつた汪向榮によつて日中両国に向けて語られ、⁽³¹⁾両国で高く評価されている。松本の思想については改めて考察する必要があるが、留学生教育に対して松本が堅持した節度の持つ価値は、実藤と対比すると更に際立つ。

(1) 一九一八年に中国人留学生の教育上の施設を運営、諸般の便宜を図ることを目的に、政財界の有志によつて設立された財団法人。やがて国庫の補助を受け半官半民の組織となつた。

(2) 「実藤文庫目録」(東京都立中央図書館 一九六六) IV頁「実藤恵秀氏略歴」より

(3) さねとうけいしゅう「中国人日本留学史」(くろしお出版 一九七〇) 一三六頁

(4) 同書 一頁「はしがき」

(5) 日華学会『中華民國滿州国留日学生名簿』(一九三七〜一九四四)から作成。一九三二年の「滿州国」建国以前は、合わせて「留日中華学生」と呼ばれていたが、

一九三七年の名簿では、溯って「中華民國」と「満州国」に分けて人数が示されている。ここでは便宜上それを用いた。

- (6) 張鑫鳳「中国文化を日本語で考える」(『環』Vol. 四 藤原書店 二〇〇一年冬 一〇八頁) に次のような記述がある。「旧満州の時代、父は医科大学に在学中でしたが、日本に留学するつもりで寝食も忘れるほどがんばって、上手な日本語を身に付けました。一九四一年、父は数百人の応募者の中から選ばれ、国費留学生として認められました。ところが、折しも時節はちょうど大東亜戦争の前夜。日本は大規模な国家総力戦のため、すべての人力と財力を尽くそうとしているところでした。留学の準備をしているところに、父は「国費留学は前面取り消し」という知らせを受けました。」
- (7) 事変のため休学帰国中の学生一〇九九名。これを差し引くと、合計は二〇三七名になる。
- (8) 事変のため休学帰国中の学生四一五名。これを差し引くと合計は一九二四名になる。
- (9) 休学帰国中の「中華民國」学生数は四二二名。
- (10) 『満州国学生日本留学拾年史』(一九四二) 六一七頁。原文も日本語。引用は七頁より。
- (11) 一九三七年九月から十月に関東軍が「察南自治政府」「晋北自治政府」「蒙古連盟自治政府」を作り、十二月には北支那方面軍が北京(北平)に「臨時政府」を樹立し、翌年二月には中支那派遣軍による「維新政府」が南京に作られた。一九四〇年三月に汪兆銘の「国民政府」が南京に成立するに伴い、北京の「臨時政府」は「華北政務委員会」に改組された。
- (12) 「日華学報」八十五号(一九四一年九月) 一一五頁。「日華学報」には他にも、八十七号(一九四二年一月)には陳羣(国民政府内政部長)「留日学生に対する訓示」、八十八号(一九四二年三月)には周作人(華北政務委員会教育総署督弁)「日米英戦争の意義と青年の責任」など汪兆銘政権との密接な関わりを示す日中両国の関係者の寄稿や談話の採録が多く掲載されている。
- (13) 同右 四四―四五頁(「資料 中華民國留日学生生活概況(その一)」)
- (14) 『日本語のはじめ』は一九三二年十一月、『日本語読本』(三分冊)は一九二六年に初版発行。いずれも刷りを重ね、一九四一年には新しい版が発行されている。
- (15) 文法一覽表や活用語の活用一覽表のほか、用例の充実した助詞分類表、漢字読法索引、難読語索引、表音的・歴史的対照漢字音仮名記法、固有名詞(地名・人名)読法表、など実用的な付録も充実している。

(16) 傀儡政権による間接統治の形がとられた中国大陸では、全学校種別に対応する全教科の教科書が編纂され、国民党政権下の教科書に強調されていた中国ナショナリズムや排日思想が削除された代わりに「同文同種」「東亜新秩序」といったスローガンや日本文化に関する教材が取り入れられた。また、一九三八年八月の教育課程改正によって毎週初等学校三・四年で六〇分、五・六年で九〇分、中学校で三時間の日本語が正規の科目として課されることとなった。

(17) 『中国人日本留学史稿』(日華学会 一九三九)の「後記」(三六七頁)に「四十二年に亘る留学史の後に、両国のかかる全面的大衝突を来したことは、完璧なる、成功せる留学史とは申されぬ。……総括的には『失敗の留学史』と申さざるを得ないであらう、これが第十章第二節の終りで『日本留学前史ををはる』と悲しくも結んだ次第である。」とある。

(18) 『近代日支文化論』(大東出版社 一九四二)二四七―二六九頁

(19) 一八八七―一九六六。清国留日学生の監督であった父、錢恂に伴って九歳で来日。成城学校・慶応義塾で日本古典文学を学び、戦後は北京大学教授、北京図書館館長を務めた。『万葉集』『源氏物語』また近松門左衛門・

井原西鶴の作品などを翻訳した。

(20) 一八八五―一九六七。散文作家。文豪、魯迅の実弟で、一九〇六年に日本に留学、立教大学で古典ギリシア語と英文学を学んだ。当時、華北政務委員会教育総監督弁であり、留学生の派遣に関わっていた。日本降伏後「漢奸裁判」にかけられ投獄された。

(21) 『近代日支文化論』(大東出版社 一九四二)二六八―二六九頁

(22) 『中国人日本留学史』(くろしお出版 一九七〇)一四八頁

(23) 『日本文化の支那への影響』(一九四〇 蜚雪書院)・『近代日支文化論』(一九四一大東出版社)・『明治日支文化交渉』(光風館 一九四三)。

(24) 同書「あとがき」五七二―五七八頁

(25) 『中国留学生史談』(一九八一 第一書房)三九五―三九七頁

(26) 『近代日支文化論』(大東出版社 一九四二)所収「支那Ⅱ中国」一四三―一五二頁。

(27) 同書所収「日支文化の性格」九頁。

(28) 実藤がこの時期に出版した訳書に『西洋文化の支那への影響』(張 星娘 著 日本青年外交協会 一九四一)・『支那化学工業史』(李 喬平 著 大東出版社

一九四二)、編著に『近代支那思想』(光風館 一九四二)がある。いずれも「支那」という呼称を用いており、中国の文化が日本や西洋に比べて劣っている、という認識が訳者・編者のものとして述べられている。

(29) 松本亀次郎『中華留学生教育小史』(東亜書房 一九三一)「緒言」一―二頁

(30) 同書 七三―七九頁

(31) 汪向榮は「中国留日教育問題——松本亀次郎氏の功績」(『華文大阪毎日』第七卷第二期第七十五号、一九四

二)・「中国人留学生のよき教師」(『中国画報』一九八〇年五月号)など戦中戦後一貫して松本を顕彰した。著書『清国お雇い日本人』(朝日新聞社 一九九二)には松本亀次郎に一章が当てられている。

二〇〇一年四月十二日受稿

二〇〇一年六月一日をへて掲載決定

(二橋大学大学院博士課程)